

溺愛デイズ

目次

溺愛デイズ

5

恋愛デイズ

171

溺愛デイズ

すっかり春めいてきた三月最後の金曜日。

ガヤガヤと談笑が繰り広げられる居酒屋で、櫻井穂乃香はビールジョッキをドンツとテーブルの上に叩きつけた。三分の二ほど減った黄金色の液体が、プチプチと炭酸の泡を弾けさせながら波打つ。

「よっ、櫻井！ いい飲みっぷり!!」

場を盛り上げようとしているのだろう。同期の滝沢弘武が、大きな声で囁し立ててくる。穂乃香はそんな彼をちらりと見て、唇に付いた白い泡を手の甲で拭った。

フェミニン系のサテンブラウスと、花柄をあしらった膝上のプリーツスカートをそつなく着こなしているくせに、穂乃香がやっていることは場末のオヤジと変わらない。だが滝沢は、女子にあるまじきその仕事を非難することもなく、穂乃香のジョッキにピッチャーからビールを注ぎ足した。

「飲め飲め、櫻井。今日は俺らの奢りだから。な？ 飲んで忘れる!」

「た、滝沢あく！ みんなあく!」

隣に座っていた滝沢をはじめ、座卓を囲んでいる同期達の同情に似た眼差しを受けて、穂乃香は

ぐじゅつと鼻を吸った。

この飲み会に集まっているのは、沢中建設・深山営業所に、平成二十二年に入社した六人だ。彼らが勤めている沢中建設は大手総合建設会社——いわゆるゼネコンで、国内でもトップクラスの業務実績を誇っている。

そんな会社に就職氷河期を勝ち抜いて入社し、早四年。数少ない同期ということもあって、彼らの結束は固い。

今日は、『駅周辺地区の再開発都市設計コンペ』に落選した穂乃香を慰める会が、滝沢の主催で開かれていた。

「櫻井、あんたはよくやった！ 今回は相手が悪かったんだよ」

「ううう……」

慰めの言葉に呻き声で返事をして、穂乃香はジョッキに口をつける。そして、目をつむりながらグビグビと喉を鳴らした。

普段は特別飲みたいとも思わないビールだが、今日ばかりは飲まずにいられない。消化しきれない悔しさが、腹の底でとぐるを巻く。

人材育成に力を入れている沢中建設では、経験の浅い建築士とベテランとでコンビを組ませて仕事をやらせている。今回のコンペでは、一級建築士の村田所長の共同提案者として、二級建築士である穂乃香が名前を連ねていた。今までで一番大きなこの仕事に、穂乃香は半年の時間と、己の魂をつぎ込んできたのだ。

産業・観光・定住の三つの機能を、駅を中心にしてひとつに繋ぐ、スパイラル型の未来都市。それが穂乃香が提案した構想だ。

穂乃香の設計のテーマは、建築と自然の融合だ。もちろん、今回の都市計画にも環境保護の視点を盛り込んでいた。

さらに災害時の対策もバッチリ考えたお陰か、第一次審査は難なく通過。最終審査の公開プレゼンテーションだつて自信があつた。審査員の前評判だつてよかつたはずだ。

事実、村田所長も手応えを感じていたようで、「これはいける」と言っていたくらいだ。なのに結果は落選。

当選を確信していただけに、ショックは大きかつた。

穂乃香だけではない。この場に集まっているメンツも、今回のコンペの結果には誰一人として納得していなかつた。

その理由は、当選したのがこの業界の有名な、『黒崎隼人』だつたからだ。

「タイミングが悪かつたと思うしかないよな。あの黒崎隼人が同じコンペに出場してたなんて。もしも黒崎がいなかつたら、村田所長と櫻井の案が通つてたんじゃないか？」

同期の一人がため息混じりにそう零す。その声に触発されたのか、滝沢は自分の鞆から取り出した一冊の雑誌を、テーブルの上に放り投げた。

「タイミングなんてもんじゃねえよ。計算だろ計算。お前らも知ってるだろ？ 今月の『アーキテクスト』に、黒崎隼人の特集が載つたの」

放り出されたのは、建築士の間ではメジャーな雑誌だ。滝沢は情報通を気取つていて、様々な情報誌を幅広く読んでいる。

穂乃香はジョッキをテーブルに置くと、その雑誌に手を伸ばした。

モダンな建築物が写っている表紙には、『黒崎隼人』の名前がでかでかと載っている。コンペ最終審査の一週間前に発売されたこの雑誌は、彼、黒崎隼人を特集したものだ。

穂乃香はゆつくりとページをめくつた。

(わ……かつこいい……)

ページの一枚を割いた黒崎隼人の写真に、思わず目を奪われる。

さらりとした黒髪に、高い鼻梁。インテリっぽい黒縁の眼鏡がよく似合っている。寡黙な人なのだろうか、唇を引き結び、階段の手すりにもたれるようにして、視線をカメラから外していた。ノーネクタイでも、彼のフォーマルな雰囲気は崩れていない。

(この人が『黒崎隼人』……)

ページの左下に、彼のプロフィールが白文字で小さく書かれていた。

大学で建築学を専攻し、卒業後は都内の建築事務所就職。二十四歳で一級建築士の資格を取得。二十五歳で渡仏。AAA—Alexandre Auber Architecteに所属、アレクサンドル・オベールに師事。三十歳で帰国。黒崎隼人建築設計事務所を設立。三十二歳でJMM Design Award 2013金賞受賞——

そう、彼は国際的に有名なフランス人建築家の愛弟子として有名なのだ。

彼の華々しい経歴に軽い嫉妬を覚える。穂乃香は緩くウェーブした茶色の髪を、不貞腐れつつ指に絡めた。

(ちえっ……全部ストレートコースか。いるんだよな……こういうエリート。神様って不平等だなあ……)

穂乃香だって一級建築士を目指している建築家の端くれだ。この資格を取ることがどれだけ大変なのかは、よくわかっているつもりだ。

一級建築士の受験資格は、大学を卒業後、二年の実務経験を経てようやく得られる。つまり、多くの受験者は仕事をしながら試験勉強をすることになるのだ。当然、並々ならぬ努力と、強靱な精神力が要求される。

人の努力の結果を天からの才能だと言ってしまうこと自体が僻んでいる証拠なんだろうということは、わかっている。わかっているが、努力しても合格率十パーセントの中に己が入っていない現状を鑑みると、やはりそこには努力の及ばない才能というものがあるのではないのか？ と、考えたくなるのだ。

おまけに黒崎隼人は顔もいいときたまもんだ。きっとこの男は、前世でよっぽどの善行を積んだか、神に愛されているかに違いない。

穂乃香はまじまじと黒崎隼人を見つめた。すると滝沢は、雑誌に載っている黒崎隼人の額を、指でバチコンと弾いた。

「コンペの最中にこんなもんが出ちまったら、審査員だって黒崎を選ぶに決まってるだろ？ こう

やって取材を受けてんだ。こいつはてめえの記事が雑誌に載ることくらい知ってたはずだ。ちょうど雑誌が発売される時期にコンペに出れば、好感度が上がるって寸法よ。なにが『フランスの巨匠、アレクサンドル・オベールの愛弟子』だ。こいつ絶対に性格悪いぜ」

吐き捨てるように滝沢が言う。

業界でもメジャーな雑誌に載ったことで、黒崎隼人は今や時の人だ。

そんな人の案を蹴るなんて、審査員の面々もやりたくないに違いない。巨匠の顔に泥を塗るようなものだ。それに、『フランスの巨匠、アレクサンドル・オベールの愛弟子、黒崎隼人が設計した』というネームバリューが欲しかったとも取れる。

今回のコンペの審査に「見えない力」が働いたのではないかという思い——それが、穂乃香達が落選という結果に納得できない理由だった。

「マジで腹立つぜ、黒崎隼人。スカしたツラしやがって。去年のデザインアワードで金賞受賞しってから、依頼だけで十分食っていけるくせに、今更コンペに出場だなんて……マジで何考えてんだ？ 櫻井、今回の結果は気にすることなんてないからな」

「滝沢。ありがとね」

同期の中でも、特に滝沢は自分のことのように怒ってくれている。そんな彼の気持ち嬉しく、くによっと笑ってみせると、彼は穂乃香の頭をポンポンと撫でてきた。口は少々悪いが、根はとても優しい男なのだ。

「誰が何と言おうと、お前のあの案はよかった！ 次は黒崎隼人に吠え面かかせてやれ。黒崎がコ

ンペ以外で受注する仕事は、女社長の物件ばかりだつて噂だぜ。どうやって仕事取ってるんだかなつ、たくよお。ツラがいい奴は得だぜ」

「えっ!?」

滝沢の言葉に、穂乃香は目を剥いた。確かに彼は綺麗な顔立ちをしていると思う。思うが――
(まさか……)

穂乃香の心の声が聞こえたかのように、滝沢は声を潜めると、とんでもないことを聞かせてきた。「まさかと思うだろ? 他にもあるぞ。あいつの設計が、ある時期からいきなり変わったらしいんだ。そこから急に売れ出したんだつてさ。実は別人が設計してるんじゃないかって噂もある」

「ええっ!? 何それ!!」

黒崎隼人ほど名の知れた建築家ともなれば、指名で依頼が来ることも多いはずだ。なのに、別人が設計しているだなんて。それはクライアントに対する裏切り行為に他ならない。

「コンペに自分の特集をぶつけてくるような奴だぞ。裏で何やってるかわかんねーよ」
(そんな卑怯者に負けただなんて……)

何が日本の建築業界を担う若手建築家だ。とんでもない奴じゃないか。

コンペで負けた悔しさも相まって、穂乃香の負けず嫌いに火がついた。落ち込んでなんかいられない。必ずこの雪辱を果たさなくては! という気持ちだが、フツフツと沸き起こってくる。

「打倒、黒崎隼人!! 首を洗って待ってなさいよ。次はわたしが勝つ!!」

「櫻井よく言った! その意気だ!」

酒が回って気が大きくなった穂乃香のライバル宣言。それに対して滝沢は拍手をして、ビールを注ぎ足してくれた。

同期達も、煽るように盛り上げてくる。

「櫻井、頑張れ〜!」

「黒崎隼人になんか負けるな! 俺達の沢中魂を見せてやれ!」

「任せて! 黒崎隼人を超えてやるんだから!」

温かい声援を受けて、穂乃香はビールを一気に飲み干した。

2

本人を前にしない黒崎隼人へのライバル宣言から数日後。桜の花びらが絨毯のように敷きつめられた石畳の道を、穂乃香は段ボールを抱えて走っていた。ついさつき降りはじめた雨は、容赦なく穂乃香を濡らす。遅咲きの桜も、この雨でずいぶんと散ってしまうことだろう。

今日は都内の某大学キャンパスで、シンボリストリートデザインコンペの二次審査が開かれることになっていた。

今回、沢中建設・深山営業所から応募しているのは、我らが村田所長だ。その共同提案者には、滝沢の名前が並んでいる。穂乃香はそのサポートに回るようになっていた。

応募総数二百作品を数えた一次審査をぐり抜け、二次審査に残っているのは十五作品と聞いている。その中に黒崎隼人の名前はない。彼が参加していないなら、選ばれるのは沢中建設だろうと、穂乃香は確信していた。

黒崎隼人は確かに巨匠の愛弟子で、今や時の人かもしれない。だが、積み重ねてきた経験と実績は、沢中建設のほうが上なのだ。

(仮に黒崎隼人がこのコンペに出ていたとしても、所長と滝沢の作品が選ばれるに決まっている！) その所長と滝沢はプレゼンテーションの打ち合わせのために、一足先に会場に入っている。

プレゼンテーションが始まる前にこの展示用パネルを会場に運び、設置するのが今回の穂乃香の仕事だ。

社用車を停めた駐車場からかなり急いで運んだのだが、パネルを保護する段ボールは雨でだいぶ濡れてしまっていた。傘は車に積んでいたのだが、段ボールが大きくて両手が塞がってしまい、さすことができなかつたのだ。

自分が濡れるのもどうでもいい。だが展示用パネルが濡れるのは困る。

今回のプレゼンテーションは公開式のものだから、パネルは会場の壁に張り出され、審査員をはじめとした傍聴者が見ることになる。その中には、同業者や、建築士を目指す学生もいることだろう。沢中建設がどんな仕事をするのか、多くの人がパネルを通して知ることになるのだ。いわばこのパネルは、沢中建設の名刺であり看板でもある。濡らすわけにはいかない。

(ああ〜もういきなり降ってくるんだもん、最悪！ パネル大丈夫かな……)

不安になった穂乃香は、ようやくたどり着いた建物のエントランスホールで段ボールをそっと開けてみた。中に入れていたパネルは、念のためビニールで包んでいたお陰で無事なようだ。ホッと胸を撫で下ろすと、そのままエレベーターに向かった。

いつもはカジュアルなオフィスファッションで纏めている穂乃香だが、今日ばかりは違った。裏方とは言えども公式の場に臨むのだから、奮発して買ったグレーのパンツスーツでばっちり決めている。しかし、そのスーツも今はじつとりと濡れてしまっていた。

(パンツが泥ハネで汚れてたら嫌だなあ〜。クリーニングに出したばかりなのに)

濡れたせいで髪の毛が強くなっている。頬に張り付いた髪を気にしながらエレベーターの前に来た時、あるものが目に入って、穂乃香はがっくりと肩を落とした。エレベーターのボタンの上には、飾り気のない貼り紙が一枚――

『節電のため、エレベーターを停止しています。階段をご利用ください。エレベーターのご利用を希望される方は事務所までお越しく下さい』

「イベントがある日くらい節電はやめようよお〜」

思わず声に出して突っ込んでから、穂乃香はため息をついた。

公開プレゼンテーションの会場は四階だ。階段を使って四階までこの段ボールを運ばないといけないかと思うと、げんなりする。段ボールが、大きさの割にそう重たくないのがせめてもの救いか。

穂乃香は気を取り直してエレベーター横の階段に向かった。

——トントントントン……と、リズムカルに足を動かし、階段を一段飛ばしで上っていく。

穂乃香はアパートの三階に住んでいて、毎日階段を上り下りしている。そういうわけで階段なにご慣れたもの、と舐めてかかったのが悪かったのか——目的地の四階でヌツと出てきた人影に、穂乃香は面喰らった。

「きゃっ！」

「おっと！」

あわやぶつかる！ といったところで足を止め、顔を上げてさらに仰天する。

微かに目にかかる長めの前髪。ノーネクタイのブラックスーツに身を包んだ長身の男は、先日雑誌で見ただばかりのライバルだった。

(く、黒崎隼人!? なんでここに!?)

眼鏡の奥で、爽やかな切れ長の目が大きく見開かれて、どこか少年のようなあどけなさを垣間見せた——気がした瞬間、穂乃香は反射的に後ずさってしまい、階段を踏み外した。

(落ちる!?)

そう思った時にはもう遅かった。

バランスを崩した身体が真後ろに傾き、ジェットコースターが急降下する時に似た浮遊感を味わう。嘘みたいにしてすべてがスローモーションに見えて、息をするのも忘れた。

「危ない!!」

焦った顔をした黒崎が叫び、こちらに向かって手を伸ばしてくる。しかし穂乃香の両手は、大切な展示用パネルが入った段ボールで塞がれていた。

やたらと沓え渡った頭は、「段ボールを放り出せ! そしてあの男の手を取るんだ!」と、命令しているのに、身体が硬直して動かない。まるで、自分の身体が自分のものではなくなったかのようだ。ただ目だけが、黒崎の手の動きを追っていた。

雨には降られるし、エレベーターは止まっている。そして今、階段から落ちようとしている。

(ツ、ツイてない……わたし、最近こんなのばかりじゃん……)

伸ばされた黒崎の手が空を切るのと、段ボールを抱えたままの穂乃香が階段から真っ逆さまに落ちたのは、ほぼ同時だった。

3

「……うん……?」

穂乃香はぼんやりとした意識の中で目を覚ました。一二、三度瞬きをして、視界に映る天井を見つめる。

(あ……この蛍光灯、直管形蛍光灯タイプのLEDだ……だって端まで明るいもん……)

大型の商業施設は、ここ数年でほとんどこのタイプの蛍光灯を取り付けるようになったんだよな

「だなんて、どうでもいいことを考えていると、男の顔が目の前に現れた。

「気がつきましたか？」

男は眉を寄せて、眼鏡の奥の瞳を心配そうに揺らしている。

(……この人……)

どこか見覚えのあるその男の顔を見ていると、だんだんと意識がはっきりしてきて、穂乃香は目を見開いた。

「く……黒崎隼人!! ……さん!」

ついうっかり呼び捨てにしてしまい、慌てて敬称を付け加える。

自分の名前が聞こえたからだろうか。彼がホッとしたように笑った。

「ああ……よかった……本当に……本当によかった……」

心の底から安堵した声を出す黒崎に、穂乃香は戸惑いを隠せなかった。どうして彼が自分の側にいるのかわからない。

「あ、あの……」

穂乃香が身体を起こそうとすると、彼が急いで制止する。

「待つて。まだ横になっていたほうがいい。あなたは階段から落ちたんですよ、覚えていますか？ 頭を打っているから、急に動いてはいけません。ここは病院です。すぐに看護師さん呼びますから。今はじっとしててください。ね？」

病院という言葉に反応してぐるりと辺りを見回す。壁も天井も、ついでに掛けられている布団も

白い。ベッドサイドのテーブルには、カード式のテレビが設置されている。彼の言ったとおり、ここが病院であることは一目瞭然いちもくりょうぜんだった。それもどうやら個室らしい。

「中央病院です。救急車で運ばれたんですよ。さあ、横になって」

「はあ……」

何がなんだかわからないが、黒崎が必死な様子で説得してくるので、生返事で頷く。打った頭を冷やすためか、枕に保冷剤が入れているようで、ひんやりとしていた。

中央病院と言えば、プレゼンテーションの会場になっていた大学からかなり近い。

ナースコールで看護師を呼ぶ黒崎を横目で眺めているうちに、穂乃香はぼんやりとだが、自分の身に何が起こったのかを思い出しはじめた。

(落ちた……ああ……そっか、わたし、階段から落ちたんだ……。うわー展示パネル、壊れてないといいんだけど……プレゼンはどうなったんだろ?)

色々不安がよぎるが、今はとにかく身体が怠だるくて重たい。打ったという頭が気になって手を伸ばすと、腕には針が刺さっており、針から伸びたチューブがスタンドに吊された点滴のパックに繋がっているのではないか。まるで重病人のようだ。

改めて我が身を振り返れば、着ていたはずのスーツは脱がされて、代わりに前合わせの寝巻きを着せられている。

胸元を隠すように布団を引き上げると、コンコンと部屋のドアが叩かれた。

「はい。こんにちは。目が覚めましたか。ご自分の名前言えますか？」

やや早口で喋る中年の医師が、若い女性看護師と共に部屋に入ってくる。

「えっと……櫻井穂乃香、です」

「はい、結構ですよ。櫻井さん。ではベッドを起こしますね」

医師はベッドの背もたれを起こして、穂乃香の診察をしてくれた。診察といっても、ほとんどが問診だった。

黒崎はまるで家族のように病室に留まって、医師の話と一緒に聞いている。付き添ってくれている彼を追い出すのもなんだか変な気がして、穂乃香は何も言わなかった。

「うんうん。目の動きもおかしくないし、意識もハッキリしてるね。気分はどうですか？」

「少し怠いです」

「吐き気は？」

「ありません」

「痛みは？」

「……少しあります」

「うん、まあ少しは仕方ないかな。今してる点滴に痛み止め入ってるの。この点滴、今日一日とこうね。抜いたらものすごく痛いからね。あなた、右足首が折れてるの。ちようどくるぶしのところね。今ギプスで仮固定してるんだけど、見る？」

ボンボンボンと軽快に繰り返される説明に、穂乃香はポカンと口を開けていた。足元の布団を軽くめくられると、白い塊と言っても差し支えない足が現れる。ギプスに包まれたそれを見てしまえ

ば、途端に痛みが増してくるような気がした。

「こ、骨折……ですか？」

「うん。あとたんこぶ」

医師は、たんこぶはたいしたことがないと言う。そして、看護師に持たせていた茶封筒からレントゲン写真を取り出すと、蛍光灯にかざした。

「これがあなたの骨ね。ここね、くるぶしのところが骨折してずれちゃってます。わかる？」

初めて見る自分の足首の骨は、言われてみれば、本来の位置から少しずれているような気がする。骨の窪みと出っばりの位置が噛み合っていない、と言ったらいいだろうか。

「これ、手術した方がいいです。ギプスでの固定だけじゃ時間もかかるし、綺麗に治らないかもしれないからね。僕としては手術をオススメします。ワイヤーでね、ちよいちよいと固定するんです。すぐ終わっちゃいますよ」

「……手術……」

指先でワイヤーを捻る動作をする医師の言葉を、穂乃香はおうむ返しのように呟く。医師はにっこり笑ってレントゲン写真をしまった。

「頭を打ってるから、念のために今日は入院しようか。手術するならそのまま続けて入院。入院は十日間くらいかな。今日中に手術するって決めてくれたら、明日の午後が空いてるから手術できますよ。執刀は僕ね。手術しないなら明日退院できるけど、結構大変だよ？ くっつかない場合もあるしね。きちんと治らなかつたら偽関節っていうて、関節みたいに動く骨になっちゃって、痛みが

残ったり、動きにくくなったりする可能性もあるしね」

そのあと、細かい説明を看護師がしてくれた。

穂乃香が着ていたスーツは、治療のためにハサミで切ってしまったこと。持っていた財布やスマートフォンはベッドサイドに備え付けてある金庫に入っていることなどを告げられる。(うわーん！ やっぱ最悪!! あのスーツ高かったのに……)

ハサミで切られてしまったら、もう使い物にならないじゃないか。仕方ないことだとはいえ、苦いものを感じてしまう。

「あとで入院の書類を持ってきますから」

そう言つて医師と看護師が出て行くと、入れ違いに今度は穂乃香の両親が入ってきた。

「お、お母さん!? お父さんまで!!」

「ちよつとお、穂乃香、大丈夫なの？ 階段から落ちたんだってね。会社から電話がかかってきたわよ？ おかーさんビックリしちゃった！ 本当に馬鹿なんだから。落ちるのは一級建築士の資格だけにしなさいな。毎度、毎度、落ちてばっかりでまあ飽きもせず階段からも落ちるなんて！ そしてなあに!? その足！ おとーさん見てよ！ この子、本当に足折っちゃったの？ ヤダ！ ほんつと馬鹿ねえ！」

開口一番から、どこで息継ぎをしているのかわからないほどまくし立ててくる母親に、穂乃香は顔から火が出るかと思つた。なにせ隣には、穂乃香が落ちてばっかりの一級建築士の資格に一発合格しているお方——黒崎隼人がいるのだから。

「や、やめてよ、お母さん！ 恥ずかしいじゃない!!」

穂乃香が焦つた声を出すと、ようやく黒崎の存在に気がついたのか、母は口元を押さえて一オクターブ高い声を上げた。

「あら？ あらあらあら、あらっ？」

そのニヤついた目は、完璧に好奇心に染まっている。

「穂乃香、そちらの方は？ 会社の方？ もしかして、お電話くださった方かしら？」

まったく……この母親には、怪我をした娘を労る親心というものはないのだろうか？ 穂乃香はため息をつきたい気持ちを呑み込んで、首を横に振つた。

「この人は——」

黒崎を紹介しようとして、ふと言葉に詰まる。業界では有名な人物だが、知り合いというわけではない。むしろ、どうして彼がここにいるのか、穂乃香の方が知りたいくらいなのだから。

「えつと……」

穂乃香が躊躇いがちに黒崎を見ると、彼は小さく微笑んで穂乃香の両親に向かって頭を下げた。

「初めまして。黒崎と申します。電話は、私が沢中建設の村田所長に頼んでしてもらいました」

名刺をスマートフォンに取り出して、両親に手渡す。黒崎の名刺を受け取った穂乃香の母親は、彼の肩書きを読み上げた。

「株式会社黒崎隼人建築設計事務所代表？ あら、一級建築士。事務所をお持ちなの？」

「はい。まだ立ち上げて二年目ですが」

黒崎が事務所持ちの一級建築士と知るやいなや、穂乃香の母親の目がランランと輝きだした。それを見て、穂乃香に嫌な予感が走る。

「失礼ですが、あのオウうちの穂乃香とはどういう……？ もしかして付き合ってるのか？」

「だったらいいな、という期待を滲ませた母親の問いかけを、穂乃香は力いっぱい否定した。

「おかーさん!! そんなわけないでしょ!? やめてよ!」

「なんだ。つまんない」

「つ……つまんないって……」

恥ずかしくって、いたたまれない。穂乃香は布団を引き寄せ顔を埋めた。

二十六にもなるというのに、穂乃香は今まで一度たりとも男の人と付き合ったことがない。大学の頃はもとより、今でも自分の時間はすべて建築のための勉強に費やしてきた。男の人と付き合う余裕なんてあるはずがない。一級建築士の試験に受かるためには、一に勉強二に勉強、三、四がなくて五に勉強。とにかく勉強あるのみなのだ。

初めの頃は、一級建築士を目指す穂乃香を応援してくれていた母なのだが、穂乃香が二回連続で試験に落ちた頃から応援のテンションはだだ下がり。「やっぱり無理なんじゃないか」といったムードを漂わせ、それどころか去年、穂乃香の一つ上の従姉が結婚したのをきっかけに、「誰かい人はいないのか」としつこく聞いてくる始末――

その実家でのノリを、他人がいる前でやられたのでは堪らない。しかも、よりによって黒崎隼人の前で――

(……本当に最悪……)

穂乃香が耳まで真っ赤にしていると、黒崎が会話に入ってきた。

「すみません。私はご両親にお詫びをしなくてはなりません。お嬢さん――穂乃香さんが階段から落ちてしまったのは私のせいです。本当に申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げる黒崎を見て、穂乃香は口をポカンと開けていた。

「え？ え？ ええ!? どうしてそうなるんですか？ あれはわたしが勝手に落ちたんです!」

驚きながらもそう叫ぶ。

「いや、あなたを驚かせてしまったのは俺ですから。――言い訳はしません。大切なお嬢さんに怪我をさせてしまいました。この責任は私にあります。お許しただけるなら、完治するまで、お嬢さんの面倒を私のほうで見させていたきたいのですが、よろしいでしょうか」

「ちよ、ちよっと待ってください!」

穂乃香は黒崎を制止しようとするが、彼は聞かない。それどころか、穂乃香の怪我の具合を説明しはじめた。

「さっき穂乃香さんを診察してくださった医師によると、骨折は手術をしたほうがいいとのことでした。手術をしないと、完治までに時間がかかる上に、綺麗に治らないかもしれないそうです。手術となると入院になりますが、かかる費用は全額私が負担します」

「ちよっと、黒崎さん!!」

どうして彼がそこまでする必要があるのか。ちよっと出会い頭にぶつかりそうになっただけで、

実際はぶつかってもいない。穂乃香が勝手に驚いて、勝手に後ろに下がって、勝手に階段から落ちたのだ。なのに彼は、そのすべてが自分の責任だと言う。

穂乃香の両親は一瞬間を見合わせたが、すぐにケラケラと笑いだした。

「あらーそうですか？ ではお願いします。穂乃香、お言葉に甘えてしまいなさいな」
「はあっ!？」

普通、そこは断るところだろう。だが、この母親に常識を求めるのが間違っていた。

「だって、おとーさんと私、明日から沖縄に行くことになってるのよ。言ったでしょ？ 五泊六日」

そう言われてハツとする。ずいぶん前ではあったが、「おとーさんが定年退職したから、沖縄に旅行に行く」というようなことを言っていた気がする。

「えっ！ 沖縄って明日からだっただけ？」

「そーよ、明日からよ。んもう、やだわこの子ったら忘れたの？」

穂乃香の母は両手を胸の前で組み合わせると、沖縄への熱き思いを語りだした。

「一度行ってみたかったのよねえ、沖縄！ ゴールデンウィーク前に行つとかないと、沖縄は梅雨入りしちゃうのよ。今のうち、今のうち！ そこで私は島人になるの。どんだけ入院するか知らないけど、もう子供じゃないんだし、親がついてなくても大丈夫でしょ？ それに、旅行を前日キャンセルすると、料金の四十パーセントが取られるのよ？ 冗談じゃないわよ」
「いやいやいやいや、そこは娘についてようよ、親なんだからさあ!!」

娘の一大事に、キャンセル料がなんだと言うのか。

(何が「島人」よ。一人娘が大事じゃないの!?)

穂乃香があらさまにむくれると、黒崎が一步前に出た。

「そういう事情でしたら、手術の付き添いは私がします」

「あ、お願いできますか？」

「はい」

穂乃香をそっちのけにして、またもや母と黒崎の間で話が勝手に進んでいく。穂乃香は思わず抗議の声を上げた。

「ち、ちょっと待ってください！ わたしは手術するなんて言つてませんから！」

今日一日は入院するように言われたが、手術をしないのであれば、明日には退院できるはずだ。

自慢じゃないが、穂乃香は一度も入院や手術を経験したことがない。手術しないで済むなら、そのほうがいいとさえ思っている。

(だって怖いし……)

穂乃香の手術に対する躊躇いを感じ取ったのか、今まで無言どころか空気のような存在だった穂

乃香の父親が、口を開いた。

「穂乃香。手術しとけ。それがよか」

九州出身の父は、普段は無口なのだが言うべきことは言う。そしてその一言が重い。だからこそ、家庭内で父の発言は絶対に近いものがあつた。おちゃらけた母でさえも、父の言葉には逆らわない

のだ。

家長の決定に、穂乃香は思わず頷いてしまっていた。

「……はい……」

「じゃ手術することで決定。黒崎さんでしたっけ」

「はい」

穂乃香の母に呼ばれて黒崎が返事をする、母は深々と頭を下げた。

「不束な娘ですが、どうぞ末長くよろしく願います」

「なんかそれ、お願いの仕方が違う!!」

まるで嫁入りする時のような挨拶をされて、穂乃香は反射的に突っ込んだ。だが母はペロツと舌を出してすつとほける。反省の色なんか欠片もありません。

「まあまあ、そう固いこと言わないの、別に嫁に貰ってもらったって構わないんだから、お願いしとくに越したことはないでしょ」

「な、何言ってるの!？」

母のトンデモ発言に、穂乃香は目をひん剥いて仰け反った。

会って間もないにもかかわらず、「嫁に」だなんて言われて、黒崎が不愉快に思ったかもしれないではないか。申し訳なくって彼になんて言えばいいのかわからない。

思わず顔を押しえると、「プププ。照れちゃって！」だなんてからかわれる始末だ。

「もう……何しに来たのよ……」

思わず疲れた声が漏れてしまう。すると穂乃香の母は、持ってきていたポストンバッグと紙袋を、デデンとベッドの上に置いた。

「忘れてた。これ、アンタの着替えね。うちにあった服を適当に持ってきたから」

「ありがと……」

ちらりと紙袋の中を見ると、穂乃香が使っていたパジャマ代わりのルームウェアをはじめ、見覚えのある衣類や細々したものが入っている。どうやら実家に置いておいたものを、持ってきてくれたらしい。穂乃香が受け取ると、母は携帯を出して黒崎に話しかけた。

「黒崎さん。一応、私の連絡先を渡しておきますね」

「ありがとうございます。では私も」

ベッドの横で、母と黒崎が互いの電話番号を交換している。そんな二人を見ながら、穂乃香は苦々しい顔をしていた。

「つてか何なの？ この成り行きは!」

手術は受けたほうがいいらしいので、そこは仕方がない。だが、なぜ黒崎の世話にならなくてはならないのか。彼には何の責任もないのだ。しかし、母と黒崎の間では、黒崎が穂乃香の面倒を見ることが合意している。何も言わないということは、父も賛成なのだろう。

黒崎と連絡先を交換した母は、満足そうに笑うと父の背中を押した。

「じゃあね、穂乃香。おかーさん達、帰るわ」

「えっ！ もう帰るの!？」

うるさい母親だが、帰ると言われると急に心細くなる。穂乃香が不安に眉を下げると、母は小さく肩を竦めた。

「帰るわよ。明日から旅行だつて言ったでしょ？ 荷造りしなきゃ。急に電話で呼び出されたもんだから晩ご飯の支度もしないし、アンタが思ってるほどこっちは暇じゃないのよ。じゃあね、手術、頑張んなさいな。黒崎さん、あとよろしくお願いします」

「ちよ、ちよっとお母さん！」

穂乃香が呼び止めるのも聞かないで、母は「おみやげ買ってくるわねえ」と言い残し、父と共に病室を出て行ってしまった。

(嘘でしょ？ 普通、よく知らない男の人に嫁入り前の娘を預ける？ ありえない!!)

黒崎と共に病室に取り残された穂乃香は、途方に暮れてしまった。視線をやると、彼は見惚れるような笑みを浮かべて名刺を一枚差し出してくる。

「はい、穂乃香さんにも」

「あ、はあ……どうも……」

名刺を受け取ると、そこには憧れの「一級建築士」の文字が入っていた。とはいえ、彼には設計を他人に丸投げしているのではないかという疑惑があるのだが――

穂乃香は、硬い表情で黒崎に向き直った。

「あの……ありがとうございます。いろいろと……でも、本当に大丈夫ですから！ 責任取るとかやめてください。母はああ言っていましたけど、ここまで付き添ってもらっただけで十分な

です」

だが彼は、「いいえ」と首を横に振る。

「それでは俺の気が済みません。本当はあの時、穂乃香さんを助けられたらよかったんですが……」
神妙な顔をして俯く彼は、穂乃香を助けられなかったことを酷く悔んでいるらしい。

「だからせめて、完治するまではお世話させていただきます」

「いや……でも……そんなの困るんです。本当にやめてください」

「そう言わないでください。俺の自己満足なんです」

双方譲らず。

二人の攻防は、看護師が入院手続きの書類を持ってくるまで続いた。

翌日――

くるぶしの整形手術を終えた穂乃香が目を開けた時、ボンヤリとした視界に入ってきたのは、黒崎の顔だった。ぼやけていても整っている彼は、笑っているように見える。

「穂乃香さん、よく頑張りましたね。手術は大成功ですよ」

優しい声が手術の成功を教えてくれた。なんだかホッとする。

まだ眠いのは麻酔が抜けきっていないせいだろうか。全身が怠いし、目もしよぼしよぼしている。そんな時、ふと頭を優しく撫でられた。

「お疲れ様です。ゆっくり休んでくださいね」

(あ……まだ寝ていいんだ……)

額に触れる温かな体温が、一人じゃないんだという安心をくれる。

穂乃香は目を閉じて、力を抜いた。

「おやすみなさい、穂乃香さん。大丈夫、眠るまで側にいます。また明日も来ますからね……」
そんな声が聞こえたような気がした――

「こんにちは。穂乃香さん」

「もうッ！ 来なくていいって言ったじゃないですか！」

「穂乃香さんは今日も元気ですね。骨折もすぐに治ってしまっそうだ」

週末の昼下がり。ベッドの上で穂乃香は、見舞いに来た黒崎に向かって吼えた。だが彼は、穂乃香の不機嫌を気にする様子もなく、持ってきた花束を花瓶に活けている。

今日の花は、可愛らしいピンク色のチューリップだ。

そう、骨折してから四日。あれから彼は、毎日異なる花束を持って、――短時間ではあったが――穂乃香の病室を訪れている。ちなみに昨日はピンクと赤のガーベラだった。

黒崎の世話になる気など、さらさらない。だから穂乃香は、手術の翌日に見舞いに来た彼に、キッパリと断りを入れていた。

『手術は不安でしたけど、お陰様でこうして無事に終わりました。ですから、これ以上黒崎さんにお時間を割いていただかなくても大丈夫です』

『そうは言われても、俺は穂乃香さんのご両親と約束しました。責任を持って穂乃香さんの面倒を見ると――やると決めたことを途中で放り出すのは、俺のポリシーに反します』

責任感が強いのか、穂乃香の両親と約束した義務感からか、はたまた穂乃香を助けられなかった罪悪感からなのかは知らないが、彼は穂乃香を見舞うことを止めるつもりはないらしい。

病室だって大部屋でいいのに、黒崎が用意してくれたのは個室だ。なんでも彼はここの病院の改装に携わったそうで、院長と顔見知りらしい。

風呂もトイレも付いている部屋なので、有り難いことには違いないが、ここまで甘えていいものだろうか？

穂乃香はあからさまにため息をついて、固定され包帯でぐるぐる巻きになっている自分の右足に視線を落とした。

少し、イライラしている自分がある。

手術の次の日からハビリが始まっているのだが、まだ痛みが強くて思うように歩けないのだ。

医師が言うには、手術した方の足に軽く体重を掛けてもいいらしい。骨に徐々に負荷を掛けるリハビリの方法は、折れた部分の修復を促す効果があるのだと言う。しかし、そんなことできるわけもなかった。

だって、痛いのだ。

手術の翌日なんかはパンパンに腫れ上がって、まるでゾウの足のようだった。腫れは徐々に引いてきているが、足を床に着けると痛みを感じるのは相変わらず。そして、初めて使う松葉杖にもまだ慣れていなかった。

手術してからまだ三日しか経っていないのだからと、自分を慰めてみる。だが、リハビリは早いほうがいいということぐらい、素人の穂乃香だって知っていた。医師も、固定中は極端に運動量が減るから、固定を外す頃には筋肉が細くなったり、関節の動きが悪くなってしまうたりすると言う。リハビリが遅れて、このまま歩けなくなったらどうしよう、という不安が頭をよぎる。だが足を床に着けると痛い——その繰り返しだ。

焦りと不安が苛立ちとなつて、毎日顔を見せる黒崎に向かっていと言つても過言ではなかった。

「穂乃香さん」

むくれた穂乃香に、花を活け終わった黒崎が話しかけてきた。いつもはノーネクタイの彼だが、今日はキツチリとネクタイをしている。売れっ子建築家様はさぞかしお忙しいことだろう。髪を柔らかに後ろに撫で付けたビジネススタイルも、ずいぶん様になつている。さらに黒縁の眼鏡のお陰で、インテリ臭が半端ない。そんな彼が憎々しい。

(わたしだって仕事したいのに！)

「なんですか」

彼にコンペで仕事を取られた時のことをふいに思い出して、つつけんどんな態度で返事をする。するとベッドサイドの椅子に腰掛けた彼が、テーブルの上に紙製の白い箱を置いた。

「昨日看護師さんに確認したんですが、穂乃香さんは骨折での入院なので、食事制限はないそうです。ケーキを買ってきたんですが、食べませんか？」

ケーキと聞いて、ピクツと反応してしまふ。穂乃香は甘いものに目がない。特にケーキは大大大好物で、ケーキバイキングに行くとき全種類のケーキを制覇したくなるくらいだ。

ちなみに穂乃香のケーキバイキングの最高記録は、十三個である。その店ではバイキング用の小さなケーキではなく、店売り用の大きなケーキを提供していたので、その量は推して知るべし。

この病院の食事は比較的好いほうだとは思うのだが、こういったケーキ類は出てこない。「いりません！」と突っぱねてやりたいのに、箱の中身が気になつて気になつて仕方ない。

(だ、だめよ、穂乃香。相手は黒崎よ、黒崎隼人なのよ！ わたしの仕事を取つた奴なのよ！ そんな奴からの差し入れを食べるなんて……)

大好物のケーキを食べてしまいたい欲望と、いやいや食べてなるものかというプライドがせめぎ合う。

そんな穂乃香の心中を知って知らずか、黒崎は箱を開けてケーキを勧めてきた。

「それでも、好きなのをどうぞ。最近評判のピタゴラスという店で買って来たんです」

「ピタゴラス!?」

ピタゴラスはケーキ通の中では有名なカフェだ。雑誌のカフェ特集には、必ずと言っていいほど載っている。穂乃香も一度は行きたいと思っていた店だ。だがそこは、ケーキのテイクアウトを行っていないはずなのだが……

そう思ったのが、顔に出ているのだろうか。黒崎はニコッと笑った。

「入院している友人に持って行きたいと相談したら、店長さんが特別に対応してくれたんです。だから、お店の人の親切に報いるためにも、ここは穂乃香さんに食べていただきたいな、と」

「え……そ、そうですか?」

「ぜひ」と後押しされて、穂乃香は仕方ないなあ〜と言わんばかりの表情で箱の中を覗き込んだ。

店の人が特別に用意してくれたなら、食べなくては。ケーキに罪はない。

箱の中にはオーソドックスなイチゴのショートケーキ、さくらんぼがたくさん乗ったフルーツタルト、そしてチョコレートケーキが一つずつ入っていた。

どれもこれも本当においしいそうで、思わずゴクリと生唾なまばはを呑む。

「お、おいそうですね」

穂乃香はライバルからの差し入れだというのも忘れて、ケーキに見入ってしまった。

生クリームたっぷりのショートケーキもいいが、フルーツの下にカスタードクリームが入ったフルーツタルトも捨て難い。いや、それとも大人なチョコレートケーキにするべきか——本来テイクアウトでは食べられないケーキだと思うと迷いが生じる。

どれにするか選べないでいる穂乃香に、黒崎の目が眼鏡の奥で柔らかに笑った。

「全部食べてもいいですよ?」

「えっ、本当に?」

穂乃香がパッと顔を上げると、黒崎はまた笑った。

「もちろん。俺はあまり甘いものは食べないので」

「そうなんですか?」

「ええ、そうなんです。どれから食べますか?」

「じ、じゃあ、最初はショートケーキで」

穂乃香は、真っ白なクリームに包まれたショートケーキを指差した。

最初は無難なイチゴのショートケーキでその店の味を知り、次にフルーツが乗ったタルトで季節感を味わい、ラストはチョコレートケーキと共にコーヒーで締める——これが穂乃香が思う通の食べ方だ。

「ショートケーキですね」

ぬかりなく用意されていた紙皿の上に、黒崎がケーキを取ってくれる。なんと彼は、使い捨てのフォークまで用意してくれていた。その周到ぶりには舌を巻く。

「なんかすみません。色々用意してもらって……」

自分の中のモヤモヤを黒崎にぶつけてしまったことを反省しながら謝ると、黒崎は「いいえ」と首を横に振った。

「俺が好きでしていることですから」
「でも——」

責任も、義務も、罪悪感すら彼が感じる必要はないのに——穂乃香がそう言おうとしたのがわかったのか、彼はスツと席を立った。

「コーヒーを買ってきますが、穂乃香さんも何か飲みますか？ ついでに買ってきますよ」

備え付けの冷蔵庫には、ミネラルウォーターが入っている。しかし、ケーキのお供が水というのも味気ない。ケーキをコーヒーで締めることが好みの穂乃香は、悪いな……と思いつつも、彼の厚意に甘えることにした。

本当は自分で買いに行きたいが、慣れない松葉杖を両手についた状態で、買ったコーヒーを病室まで持ってくるのは不可能だ。缶やペットボトルならともかく、病院の待合室にある自動販売機は、紙コップで出てくるタイプなのだ。

「すみません……じゃあ、わたしもコーヒーをお願いします。ミルク多めで」

「はい」

黒崎はそう返事をして病室を出て行った。

（おいしそうだなあ）

勝手に食べるのも気が引けたので、穂乃香はツヤツヤのイチゴに乗ったケーキを見ながらオアズケ状態で待つ。黒崎はすぐに戻ってきた。

「ありがとうございます。あの、お金払います。おいくらでした？」

穂乃香が財布を出すと、テーブルにコーヒーを置いた黒崎は小さく肩を竦めた。

「いいですよ、これぐらい」

「え、でも……」

「それよりケーキをどうぞ。おいしいといんですけど……はい、あーん」

そう言うなり、黒崎がフォークで一口大に切ったケーキを穂乃香の口元に差し出してきた。

「え……あ、あの、自分で食べられますから……」

利き手を骨折しているのならまだしも、穂乃香が折ったのは足の骨だ。食べることに関してはまったく不自由していない。

黒崎は一瞬キョトンとしていたが、すぐにハツとしてフォークを穂乃香に返してきた。

「すみません、本当に……素で余計なことを……」

「……いえ……えっと……じゃあ、いただきます……」

気を取り直して目の前のイチゴのショートケーキを頬張る。一口食べただけで、しつこくない生クリームのみと共、イチゴの甘酸っぱさが広がった。ちなみに、穂乃香はてっぺんのイチゴは最後まで取っておく派だ。

「あ、おいしい……」

「それはよかった。たくさん食べてくださいね」

「ありがとうございます」

ケーキで懐柔されているような気がしないでもないが、久しぶりに食べるケーキの甘さに、つい

つい頬も緩む。ここ半年あまりはコンペの準備で忙しく、のんびりとケーキバイキングに出掛ける暇もなかったのだ。その心血注いだコンペも、落選という結果に終わったが……

(それに当選したのが黒崎さんなんだよね……)

自分が落選したコンペの当選者に見舞われているという現状に、なにやら皮肉にも似たものを感じてしまう。ふと視線を彼に向けると、バチツと彼と目が合った。眼鏡の奥に、優しいような眼差しがある。

もしかすると、食べているところをずっと見られていたのだろうか。そう思うと急に恥ずかしくなって、穂乃香は口元を押さえながら赤面した。

「あの、そんなに見ないでください……」

「ああ——すみません。可愛いなあと思って、つい……」

「!? ゲホッ! ゴホッ!!」

いきなり「可愛い」だなんて言われて、驚きのあまり咳き込んでしまう。まさかそんなことを言われるだなんて思ってもみなかったのだ。第一、食べているところを可愛いと言われても複雑なだけではないか。

「だ、大丈夫ですか?」

差し出されたコーヒーを慌てて口に含んだ。

「つもう! 何言ってるんですかッ! 変なこと言わないでください!!」

「え。俺、何かおかしなこと言いました? 本当のことを言っただけなんですけれど。なんだかこ

うしていると、可愛い穂乃香さんを独り占めしているような感じで、役得だなと思って「な……な……なにを……」

穂乃香は赤くなっていた頬をさらに染めて、フォークを持ったまま硬直してしまった。

仕事で男の人と話す機会は多いのだが、プライベートでは勉強漬けで、年齢〓彼氏いない歴を着々と更新している穂乃香は、色恋に関して免疫がなかった。だからさして親しくもない女に、「可愛い」だなんてヌケヌケと言ってくる男に、どう対応すればいいのかわからない。

気の利いた返しのひとつも言うことができずに、穂乃香は真っ赤になったまま視線を泳がせた。

そしてふと、以前、滝沢が「黒崎がコンペ以外で受注する仕事は、女社長の依頼ばかりだ」と言っただのを思い出す。

(滝沢の言っただとおりで。この人はこうやって女の人から仕事をもらってるんだ。タラシだ。タラシに違いない)

こんなふうを持ち上げられたら、誰だっという気分になってしまう。しかも、こんなにかっこいい男の人に——

きっとそれが彼の常套手段なんだと思っても、一度持ってしまった顔の熱はなかなか引かなかった。

「はは。本当に可愛いですね。穂乃香さんは前からちっとも変わっていない」

「は?」

穂乃香がキョトンとして目を瞬かせると、彼は「ん?」と笑いながら器用に眉を上げた。

(前から?)

——どこかでお会いしましたっけ? そう穂乃香が聞こうとした時、病室のドアがコンコンとノックされた。

「はい」

看護師が来たのかと思って返事をすると、顔を覗かせたのは穂乃香の友人、渡辺由紀子^{わたなべゆきこ}だった。

由紀子と穂乃香は小学校からの長い付き合いだ。大学で建築に進んだ穂乃香と、服飾系に進んだ由紀子とで道は分かれたが、社会人になってもやり取りを続けている。まさしく、親友と言ってもいい存在である。

穂乃香は自分の入院が決まった日、彼女にメールを送っていたのだ。洋服や雑貨を扱うセレクトショップへと就職した彼女の休みは週一なのだが、スタッフが休むと代わりに出勤することになる。そのため、前もって予定を立てておくのが難しい。メールでも、「行けたら見舞いに行くね」と書いてあった。

「なべちゃん! 来てくれたんだ!」

「穂乃香〜メール見たよ。大丈夫なの? あっ! ごめん、お客さん?」

由紀子は黒崎を見るとすぐにペコリと会釈^{えしやく}をした。それを受けて、黒崎も会釈を返すと立ち上がる。

「お友達もいらしたみたいですし、今日はこれで帰ります」

「え……そうですか?」

「ええ、ちょうどこれから仕事の打ち合わせが入ってるんです。では、また明日——」

黒崎が由紀子に会釈して病室を出て行く。その後ろ姿に「ありがとうございます」と声を掛けて、穂乃香は親友に視線をやった。

由紀子は露骨な好奇心に瞳を輝かせながら、九センチのヒールをカツカツ鳴らしてベッドサイドに近づき、椅子に腰掛ける。

「な、何よ?」

「今の誰? 会社の人——じゃなきそうだねえ」

彼女は黒崎を仕事関係の人間だとは思わなかったようだ。確かに、黒崎を見ると真っ先にその整った容貌に目が行く。彼には建築関係の仕事よりも、モデルか俳優の仕事のほうがしっくりくるかもしれない。

穂乃香は由紀子の勢いに半ば押されながら、黒崎のことを話した。

「階段で足を滑らせて落ちたって、メールで言ったでしょ? 出会い頭^{がしら}にあの人にぶつかりそうになったの。わたしが勝手に落ちただけなのに、『責任取る』って言って色々面倒見てくれるんだ。さつきもこうやってキーキ買ってきてくれてさ。別にいいのに、毎日お見舞いに来てくれるし……」

食べかけのイチゴのショートケーキを見せると、由紀子は穂乃香が大事に取っておいたってっぺん部分のイチゴを、摘^{つま}んで食べてしまった。

「あーっ! 最後のお楽しみに取ってたのに!」

「この幸せ者めッ!」

由紀子は奪ったイチゴをモグモグと咀嚼しながら、身を乗り出してきた。そんな彼女に穂乃香は力いっぱい反論する。

「骨折してんのよ!? 明日からのゴールデンウィークも入院なのよ!? どこが幸せなのよ!」

「あんなイケメンとお近付きになれるなんて羨ましい! 羨ましすぎる! この当たり屋め!」
「あ……当たり屋って……」

それではまるで、穂乃香がわざと黒崎の前に飛び出して行ったように聞こえるではないか。穂乃香はムツとして残っていたショートケーキを一口で頬張る。すると由紀子は「当たり屋は冗談だよ」と言っつて、膨れた頬を指先で突いてきた。

「いいなーケーキ。おいしそう」

「なべちゃんも食べる?」

「うん。もちろ〜」

穂乃香がフルーツタルトを、由紀子がチョコレートケーキを食べることにする。

「それにしても、毎日来るの? 彼」

「うん。毎日。お花持って来てくれるの!」

「えーっ、毎日見舞いに来てくれるの!? あの人、穂乃香のこと好きだったりしてえ〜」

「はあッ!」

フルーツタルトを皿に移していた手を止めて、思わず叫んでしまった。

「だってさ、普通、責任感だけで毎日は来ないでしょ〜。あの子のせいで穂乃香が怪我したわけ

じゃないんだから」

「そ、そうなんだけど……」

だからといって、黒崎が自分を好きなのだど決めつけるのは早計というものだろう。だが、ついさつき彼に「可愛い」と言われたのを思い出して、穂乃香の頬がじわっと熱を持ちはじめた。

(いやいや、あれは食べてる姿が「可愛い」って言われただけだし!)

そんなことあるわけない。だって彼は、黒崎隼人なのだ。あれだけのハイスペックな男の人に惚れられる要素が、自分のどこにあるというのか。

「あら? あらあらあら〜? 何か心当たりでもあるわけえ?」

「あ、あるわけないでしょ!? ……あの子は……た、ただのいい人だよ」

由紀子は「そうかなあ〜?」とニヤついた笑いを浮かべていたが、やがて思い出したように袋を渡してきた。

「これ、雑誌。どうせ暇でしょ?」

「ありがとー助かる!」

由紀子が持ってきてくれたのは、二十代の女性をターゲットにしたファッション誌が二冊。それから、カフェや食事処を巡り集めたカフェ本が一冊だった。さすが、穂乃香の好みをよくわかっている。

そのあとは、ケーキを食べながらお喋りに花を咲かせた。

同期の滝沢が見舞いに来てくれたのは、この日の面会時間終了間際だった。

「よお、櫻井。元気してっか」

「滝沢！」

由紀子が差し入れてくれたカフェ本のページのめくる手を止めて、穂乃香は明るい声を上げた。

滝沢に椅子を勧めると、彼はスーツのジャケットを脱いで「ふーっ」と、盛大なため息をつく。穂乃香が抜けた穴を埋めるために、忙しくしているのかもしれない。ネクタイを緩める彼の仕草に、疲れが滲み出ていた。

「悪いな。もっと早く来ようと思ってたんだが、結構仕事が詰まってさ」

「そんなのいいよー。むしろわたしのほうこそ、ごめんね……コンペの最中に抜けちゃって」

「気にすんな。それより所長が謝ってたぞ。療養補償？ 休業補償だっけかな？ なんか色々書類を用意しなきゃならんらしいが、今バタバタしてるからちよつと待ってくれって」

「うわ……所長にもごめんなさいって言うておいて。ホントごめん。忙しい時に……」

今はコンペの真っ最中だ。村田所長に余計な仕事を増やしてしまい、申し訳ない気持ちになる。

だが滝沢は「もらえるモンはもらっとけ！」と、笑い飛ばしてくれた。

「ところでコンペ、どうだった……？ そろそろ結果が出るんじゃない？」

進行中だったコンペの結果を恐る恐る尋ねると、彼は椅子を軋ませながら前屈みになって、ニツと笑った。

「おー今日結果来た。二次も通ったぞ。次は最終審査だな。今のところ、うちも含めて五作品が残ってる」

「やった！」

滝沢はずいぶん自信があるのか、「余裕だろ」とふんぞり返った。

「しっかし、お前も災難だったな」

「うん……ドジっちゃった」

包帯でぐるぐる巻きになっている足を見下ろして乾いた笑いを浮かべると、滝沢は慰めるように優しく頭を撫でてきた。

「仕事のことは心配すんな。お前はさっさと治せよ」

「うん。ありがと」

滝沢の優しさが嬉しくて微かに微笑む。すると、彼の視線が泳いで、ベッドサイドに飾ってあったチューリップの花に向かった。

「……ああ、わりい。手ぶらで来ちゃった。なんか買ってきてくりゃよかったな」

彼らしからぬ気遣いに、穂乃香はブンブンと手を振った。ただでさえ、彼には仕事で迷惑を掛けられているのだ。申し訳なくて気が引ける。

「そんなのいらないうよ！ 来てくれただけで嬉しい。コンベとか仕事とかすぐく気になってたんだ」

「うん……まあ……なんだ。結構見舞いに来てくれる人いるのか？ 親御さんとか……さすがに今の時間は来ないか？」

滝沢が、少しソワソワした様子で辺りを見回しながら聞いてくる。穂乃香はちよつぱり苦い顔をして、黒崎のことを話した。

「うん。今の時間はね、誰も来ないよ。うちの親は今沖縄旅行中なんだ、手術の日も来なかったよ。全部黒崎さんに丸投げ」

「は？」

急に真顔になった滝沢が、眉間に皺しわを寄せる。穂乃香は小さく肩を竦すくめて、手術の日は黒崎が付いてくれたこと。そして、毎日彼が見舞いに来てくれることを話した。

「わたしが階段から落ちた時、黒崎さんにぶつかりそうになったんだ。今更なんだけど、救急車呼んでくれたのって黒崎さんなのかな？」

穂乃香が尋ねると滝沢は「まあ、そうだな」と頷いた。

「本当は俺か所長が付き添うべきだったんだが、お前が階段から落ちたところを見てたのは黒崎だけだし、状況の説明とか考えたら黒崎が適任だろうって話になってさ……俺らはプレゼンもあったし……」

「そうなんだ。なんかさ黒崎さん、わたしが階段から落ちたのは自分のせいだって、責任感じ

ちゃってるみたいなの。たまたま近くにいただけなのにね。全部自分が面倒見るって。この病室も個室でしょ？ 黒崎さんが用意してくれたんだ。しかも毎日お見舞いに来てくれるし。大丈夫ですって断ったんだけど、気が済まないからって……」

「……へえ」

滝沢は不愉快そうな声で相槌あいづちを打つと、半目でチューリップを睨みつけた。

「毎日……ねえ。さすが、自分で設計してないから暇なんだな」

「うーん……暇かどうかはわからないな。今日も打ち合わせがあるって言ってすぐ帰ったし。いい人だと思うよ。こつちが申し訳ないくらいに、よくしてもらってる」

さんざんお世話になっている自覚のある穂乃香は、思わず黒崎をかばうようなことを言っていた。その言葉を聞いた滝沢は、気に入らないと言わんばかりに、フンツと鼻を鳴らす。

「どーだか。悪人ほどな、いい人っぽく見えるもんだ」

滝沢は、どうしても黒崎に対するマイナスイメージを払拭はらひきできないらしい。

黒崎を悪く言われて、穂乃香はちよつとムツとしてしまった。

「……そんなこと、ないと思うけど……」

滝沢に聞こえないくらい小さな声で、ボソボソつと反論する。

黒崎は自分で設計をしていないらしいという噂を聞いていたから、彼に対する印象がよくなかったのは穂乃香も同じだ。しかし彼は、救急車を呼んで穂乃香を助けてくれた。恩人のことを悪く言うべきじゃない。

穂乃香は黒崎のことから話題をそらした。

「ねえ、それよりも会社の様子を教えて？」

「ん？ ああ——」

その後も少し、会社の様子などを滝沢から聞いていると、女性看護師が夕ご飯の食器を下げに来てくれた。

「櫻井さん。夕ご飯は食べ終わりましたか？」

「あ、はい！」

穂乃香はまだ食べていなかったゼリーを手元に残して、空になった食器を看護師に返した。

「あと面会は二十時までですからね。あと五分で終了ですよ」

看護師に釘を刺されて、滝沢は立ち上がった。

「じゃあ、俺帰るわ」

「忙しいのに、わざわざありがとうだね。退院したらなんか奢るから！」

「はは。そりゃ嬉しい。リハビリ頑張れよ」

「りょーかい！」

滝沢はふつと笑うと、そのまま病室を出て行った。

一人残った病室に静寂が訪れ、少し物寂しく感じる。どこか置いてきぼりにされているような気がして切ない。

（はあー早く仕事に復帰したいなあ……）

穂乃香は明日のリハビリはもつと頑張ろうと心に決めて、この日は早めに就寝した。

6

（はあ〜しんどい〜）

リハビリを終えて病室に帰ってきた穂乃香は、汗を吸ったシャツを脱ぎ捨てて新しいものに着替えると、ぐつたりとベッドに腰を下ろした。

骨折してからというもの、なんだか疲れやすくなったような気がする。身体が回復しようとして、そこに体力を使っているのかもしれない。

今日は土曜日だ。穂乃香が入院している病院では、土曜日でもリハビリ治療をやっている。

穂乃香はあまり器用なほうではないため、松葉杖の使い方もいまだにぎこちない。だが今日のリハビリは、弱音を吐かずに最後までやりきった。

（今日のわたし、超頑張ったよね）

ちよっぴり自画自賛すると、穂乃香はミネラルウォーターをくびつと飲んでベッドに潜り込んだ。しつかりリハビリしたお陰で、疲れて眠くなってきたのだ。

黒崎はまだ来ていない。彼は今まで十五時頃から来るが多かった。というのも、平日の一般病棟の面会時間が、十四時から二十時だからだ。土日祝日は、朝の十時から二十時までが面会可能

な時間となっている。

穂乃香は病室の壁に掛かっている時計を見上げた。時計の針は十時四十分を指している。黒崎がいつもと同じ時間に来るのなら、まだまだ余裕があった。

(今のうちに寝ちゃおうと)

お昼になれば、そのうち看護師が昼食を持ってきてくれる。それまで昼寝だ。

穂乃香は肩まで布団を掛け直すと、惰眠^{だみん}を貪^{むさぼ}りはじめた。

「……ん……？」

頬にちろちろと何かが当たると気が配にくすぐったさを感じて、穂乃香は意識を浮上させた。そして目を開けてギョツとする。

なんと視界いっぱい広がっていたのは、柔らかく目を閉じた黒崎の顔だったのだ。

唇が触れ合いそうなその距離の近さに、慌てて仰^のけ反^そる。

(な、なんているの!?)

どういわけかわからないが、彼は眼鏡を掛けたまま、穂乃香の枕元に頭をもたれさせて、すーすーと規則的な寝息を立てて眠っているではないか。頬に当たった違和感は、どうやら彼の髪だったらしい。

不意打ちに驚きながらも、穂乃香は黒崎の寝顔から目をそらすことができなかった。

息をするのも忘れて見入ってしまった。長いまつ毛と高い鼻梁^{びりょう}が影を作り、彫りの深さを際出させている。今日の仕事は休みなのだろうか。装いはいつもよりカジュアルで、サラサラの黒髪は額に流れていた。

ふと眼鏡が邪魔そうなことに気付き、外そうと手を掛ける。気持ちよく眠っている黒崎を起こさないように気を付けながら、ゆっくりと眼鏡を外した。そうして現れたのは、初めて見る彼の素顔だった。

(きれい……)

男の人なのに、なんて綺麗な寝顔だろう。

ただ見ているだけでドキドキしてくる。穂乃香は思わず彼の頬に触れたいと手を伸ばしそうになつて——やめた。

彼を起こしてしまつたら、この時間が終わってしまうかもしれない、と思ったのだ。今はまだもう少し、彼の寝顔を見つめていたかった。

見つめながら思う。由紀子は黒崎が穂乃香のことを好きだから、毎日会いに来るんじゃないかと言ったが、本当にそんなことがあるのだろうか？ こんな綺麗な男の人が自分を？ ありえないという思いしか湧かない。だが、どうして彼はこんなに自分によくしてくれるんだろう？

「……黒崎さん……」

ポツリ……と小さな小さな声で彼を呼んでみる。すると、彼の瞼^{まぶた}がびくくと動いて、ゆっくりと目が開いた。